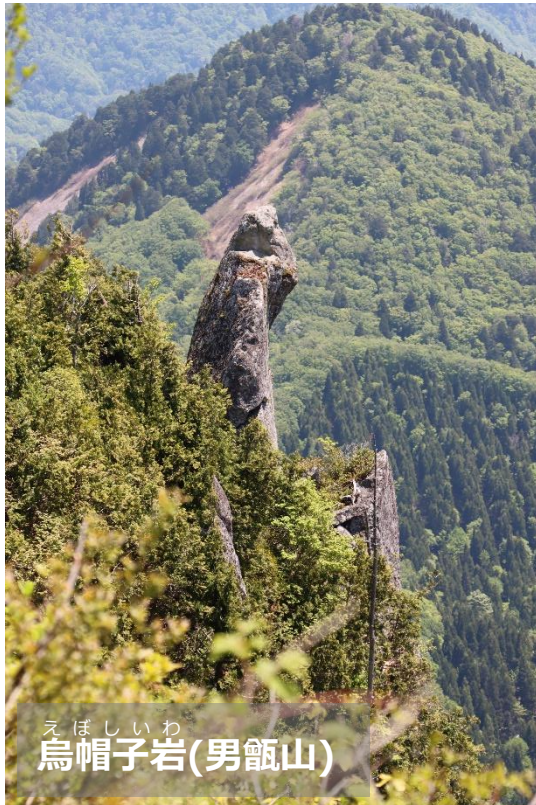


③ 赤穴



男甕山山頂間近に「観音岩」の愛称を持つ「烏帽子岩」(男山の象徴)の岩塔がそびえ立っており、この男山が「赤穴」を持つ女甕山(女山)と対峙している。



女甕山山頂から直下の断崖にある大きな裂け目(女山の象徴)、「赤穴」。あらゆる生物を生む聖地として山岳信仰の中樞をなす畏敬の洞窟と言われ、多くの伝説と謎に包まれている。



【メモ】

母子鬼山(こしきやま・のちに甕山)は、鎌倉～室町時代に修験の地として栄えた山であり、特に鎌倉幕府第5代執権北条時頼の時代に最も大きく栄えたと言われている。

その霊場として信仰を集めた最大の由縁は「赤穴」にあり、神仏の住む清浄なところとして、地元民は決して足を踏み入れることはしなかったと伝えられている。

当時、山伏(修験者)は女甕山内の修験道場(寺屋敷)にて一定の修練を積んだのち、同僚とともに女甕山頂に登り、山頂から断崖に吊り下げられ、赤穴の中に祀られてあったと言われている仏体をのぞき見る大難行を行ったとされ、この難行を「のぞきの行」と呼んだこと、あるいはこの難行により「位に及んだ」ことが「及位」地名の由来になったと言われている。(諸説あり)

【参考】：加無山県立自然公園甕山観光の手引(巨木の森ガイド会)

母子鬼山道場と及位の語源(菅原官兵衛)